〈新人対決の若狭町長選〉

か町民判断は？の藤本優勢か！

渡辺英朗氏

来年4月30日に任期満了を迎える若狭町長選。現職の引退表明を受けて、前町議の藤本武士氏と渡辺英朗氏が早々に名乗りをあげ、すでに町を二分する熾烈な選挙戦を展開。若狭町の新リーダーを決める。それも新人同士の一騎打ちとあって両陣営入り乱れ、年が明けると一気に終盤戦にもつれ込む！

〈文責：嵯峨十郎〉

越境合併から15年、その先

平成16年度、全国の自治体で〝平成の大合併〟が進められていた。県内の市町村も地方交付税削減による財政窮迫に将来の不安に駆られ、「アメとムチ」で強引に合併を進める国の方針に揺れていた。

旧三方町と旧上中町もその一つ。原発を持たない三方町は、敦賀市はもとより郡内の美浜町に財政力の差を見せつけられていた。上中町も然り。旧大飯町や高浜町の原電交付金による財政の潤沢さを横目で見てきた。

当時の千田千代和三方町長と議会は合併の相手先に郡域を超えた上中町を選択。嶺南地域で初の合併協議会を設置した。県の指導区域も三方は二州地区、上中は若狭地区。歴史的にも、住民交流も、県の土木行政も消防、病院、ごみ処理、農協もすべてが異なる越境合併。庁舎位置がどちらに決まっても山を一つ越えなければならず、両町民は「なぜ、合併なの。何のための合併なの？」と疑問を引きずっていた。

翌17年3月31日、三方郡三方町と遠敷郡上中町が合併して若狭町が誕生したが、三方庁舎と上中庁舎の2つが依然として存在する。

千田三方町長が無投票で初代若狭町長に就任すると、旧三方と旧上中の融和のためか、旧上中町職員一筋の森下裕氏が初代助役、後の副町長に抜擢される。

千田町長が1期で退任し、平成21年4月、森下副町長が無投票で初当選。2期目も無投票当選となり、3期目も無投票かと思われたが、なぜか愛知県から泡沫候補が名乗りをあげ、森下町長が圧勝。この時の投票率61・55％。これは旧三方、上中町含めて記録に残る昭和56年以降、最低だった。

3期12年間、交流人口の増加や経済発展のために力を注ぐ一方、嶺南地域の連携を常に模索してきた森下町長が今年6月、来年春の町長選に不出馬を表明した。

昨今、投票率の低下が問題視されているが、若狭町は昨年春に1人超えの小浜市・三方郡・三方上中郡選挙区の県議選と西川対杉本の知事選が行われ、知事選の投票率73・06％。平成29年10月の衆院選の投票率は66・69％。

三方、上中の合併から15年。今回は町の新リーダーを選ぶ選挙だけに有権者の関心は高く、すでに選挙戦は中盤戦に突入。新年を迎えると両陣営は一気にラストスパートの様相を呈し、町議選と重なり投票率は80％超えか。来春、若狭町の新町長と町議が決まる。

現職の後継指名受け渡辺の若さをトップに据える経営感覚と即戦力

藤本武士氏

未来のために自立する町を

藤本武士氏（56歳）は告示1年も前に、「5年先、10年先も若狭町の財政が上向くよう財政改革を行わなければならない」と、議会に辞表を提出、町長選に名乗りを挙げた。

藤本氏は美方高校卒業後、関東の大手飲料メーカー勤務を経て28年前、家族を連れて故郷若狭町にUターン。帰省当時は仕事もなく建築関係のアルバイトをしながら、父の農業を手伝った。当時の農業は毎年米価が上がるという時代で、苦労の中にもやりがいがあったが、農業を取り巻く環境は急速に変化し、従来のやり方では先を見通す事が難しくなり、嶺南初の農業法人を立ち上げ、規模拡大に踏み出した。

現在では、若い後継者を育成できる農業法人となったが、その間〝出る杭は打たれる〟。藤本氏は「その厳しい意見こそが私の財産」と当時を振り返る。

農業は若狭町の主幹産業であり、ひとつの種から大きな稲に育てる。まさに、ものづくり、人づくりの原点で、農業で培った経験、人脈をフルに活用し、町民と一緒に夢のある若狭町を創りあげていきたいと強く思った藤本氏は、行政を知るために町会議員に。

そこで民間企業では考えられない行政の進め方に疑問を持った。町の公債比率は高く、農業や漁業の税収では限度がある中、国や県の交付税頼みで何ら自助努力が見えない。お上頼りの行政から脱却し、自らの総意工夫、努力による自立が必要だと実感した。

藤本氏は定例町会で行政改革の取り組み方や小中学校の統廃合、職員の働き方改革についてなど次々と質問に立ち町の考えをただした。昨年3月も町営の上中診療所や三方のレイクヒルズ病院の経営状態や組織体制、経営改善、将来のビジョンについて質問。

今年3月の定例会で5件の